

世紀の相場師ジェシー・リバモア・・・投資の鉄則

株取引で成功を望むなら、次の点を心せよ

- ◇ **タイミング**・・・取引をいつ開始し、いつ手じまうか。そのポイントを明確にせよ。
- ◇ **資金管理**・・・金を失ってはならない。特に株取引の資金はトレーダーの命綱であることを肝に銘じること。現金をもたない相場師は、在庫をもたない小売商と同じで、相場師としての命脈は保てない。繰り返すが、現金は相場師の在庫であり、生命線であり、最も頼りになる友である。
- ◇ **感情の制御**・・・市場に乗り込む決意をしたら、単純明快な戦略を立て、それをしっかり維持していくこと。株式市場で実際の取引を行う前に、自らの心理的傾向に合った緻密な作戦を立てる。**相場師がもっとも警戒しなければならない相手は、自らの感情であり、心理である。**また、株式市場を動かすのは理性や理論、純粋な経済活動などではなく、人間の心理的側面であること、そして人間の本性はいつの世も変わらないと心得ること。実際の行動を起こすまで、誰も自らの判断の当否を知ることは出来ない。
- ◇ **実際に金を賭ける**・・・**実際に金を賭けない限り、自らの判断を試すことは出来ない。それ以外に自らの感情や心理をテスト出来ないからだ。**また、株式市場の方向を決めるのは、理性等ではなく。感情や気持ちの持ちようだと信じている。企業の業績、世界情勢、政治経済、技術革新といった要素が株価に何の影響も与えないということではない。株式市場船体の上昇や下落、ここの銘柄の値動きはこうした要素の影響を受ける。しかし、それ以上に大きな影響力をもつのが市場参加者全体の心理なのである。私は、市場の動きは極めて不確かだということに以前気がついた。株式市場は本来的に、大部分の人間の思惑を、大部分のケースについて、粉碎する働きをもっているのだ。私の定めた取引・ルールはしばしば、人間本来の意識に反する方向を向いている
- ◇ 損失は早期に切って捨てる。
- ◇ 一気に予定の額を投資するのではなく、事前に自分の判断が正しいことを確認する。
- ◇ 取引を終了する妥当な理由が見当たらない場合、確保された利益を成行き任せとする。
- ◇ 取引銘柄数を限定する。人が意識を集中させ、扱える銘柄数には限りがあるからである。
- ◇ 次々と**高値を更新していく銘柄は「買い」**である。
- ◇ **大型株が値を下げるとしばしば、買い得のように見える。しかし、その後反転することはほとんどなく、そのまま下がり続けるケースが多い。**こうした銘柄には目をくれないこと。
- ◇ 「ピポタル・ポイント理論」により、トレンドの変わり目を特定し、新しいトレンドを確認する。
- ◇ テープの数値こそ真実であり、そこに示される内容に逆らうな！相場に関する研究は周期性の研究と思ってよい。トレンドの方向がいったん変わると、勢いが弱まるまで同じ方向に進み続ける傾向がある。方向性をもつ相場のうねりは、その動きをできるだけ持続しようとする。こうしたトレンドに逆らってならない。テープには無条件に従うこと。
- ◇
リバモアは、株取引の要諦は次の三点だと強調する

- 1、**タイミング**
- 2、**資金管理**
- 3、**感情の制御**

1、タイミングに関するルール

- ◇ 投下した資金の10パーセント以上、損失を出してはならない
- ◇ 巨大な利益は「座して待つ」
- ◇ **すべての要素が好都合の状態になった時をみすまし、取引する**
- ◇ しばしば休みを取り、相場から完全に離れる機会をもつ
- ◇ **相場全体、この銘柄、いずれについても、トレンドを確認する。**相場全体の流れが思惑と逆の方向に動いている場合、状況は極めて不利である。「潮目を見て、流れに逆らわず、強風下には船を出すな」ということわざを忘れてはいけない。
- ◇ 個々の銘柄の値動きは、特定の性格を示す。活動的、慎重、神経質、直接的、論理的、先行きの予想が可能、予測不能、といった具合である。**それぞれの銘柄に注意深い目を向け、人を観察するように銘柄を見つめる必要である。**この面での理解が進むと、特定の状況下で目的の銘柄がどんな反応を示すか、ある程度読めるようになり、株価が動くタイミングをつかむ上で役に立つ
- ◇ 「買い」に入るのに高すぎるということはないし「空売り」するのに安すぎるという事はない
- ◇ 処分の難しい大量の取引を抱えている場合、一度チャンスを逃すと、痛手をこうむる
- ◇ 偶然の幸運にめぐり合ったとき、チャンスを利用しそこなうと、しばしば致命的な失敗となる
- ◇ **相場がボックス圏にあって横ばいするとき、市場は本質的に停滞している。**そうした場合、相場がいつ、どんな方向に動くかを期待したり、予測するのはきわめて危険である。相場全体、もしくは銘柄自身が動き始め、横ばいからどちらの方向に抜け出すか、じっと待つ必要がある。**現実の動きを確認するのが第一であり、先行きを予測しようとするのは間違いである。**
- ◇ 株価を動かす要因がなにか、多大の時間をかけて答えを見つけようとするのは愚かである。それよりもテープをしっかりと点検するほうが重要だ。最も重要なことは、テープが何を語っているかであり、テープがなぜそうした数字を示すのか、ではない。株式市場における値動きの背後にはそれなりの理由、不可抗力が働いているわけだが、その詳細はたいがい後になって明らかになるだけである。
- ◇ 相場は、上がるか下がるか、横ばいに推移するか、いずれかである。上昇局面、下降局面、いずれでも利益をあげることが可能である。自分の好みや主観を持ち込みさえしなければ、どちらに向かうかは大した問題ではない。**相場が横ばいになり、方向の見定めに迷ったら、休暇をとること。**
- ◇ 「ワン・デー・リバーサル」は危険信号である。当日の高値が前日の高値よりも高く、その一方で終わり値が前日の安値より低い場合、また、当日の商いが前日の商いより多い場合、要注意である。
- ◇ **取引している銘柄が予想とは逆の方向に進み始めたら、すぐ売り払うこと、これは完全な判断ミスであり、損失を即座にくい止めるべきである。**
- ◇ **種々の要素がなるべく多く好都合な形になるのを辛抱強く待たなければならない。利益確保には忍耐が求められる。**
- ◇ **株価の急激な下落に直面したら、警戒する必要がある。急落直後に反騰しなければ、さらに値下がりする可能性が極めて高い。**なぜそうなるかの理由は後に明らかとなる場合が多い。
- ◇ 相場は将来の状況をにらみながら変動している、その時点での状況はすでに株価に織り込まれているのが普通である。
- ◇ 「売り」か「買い」かのタイミングとして重要なのは基本的な動きが始まった時点、すなわち「ピポタル・ポイント」である。このトレンド変更ポイントをうまくとらえれば、多大な利益が生まれ

る。

- ◇ 「ピボタル・ポイント」は二つに分けられる。第一は「リバーサル・ピボタル・ポイント」で「基本的な相場の動きベーシック・トレンドの変化が始まる完全な心理的ポイント」である。ただしこれが長期的トレンドの底に位置するか、ピークに位置するかは問題ではない。第二の「ピボタル・ポイント」は「コンティニューエーション・ピボタル・ポイント」で、「リバーサル・ピボタル・ポイントを追認するポイント」である。いずれの「ピボタル・ポイント」もしばしば、商いの大幅増とともに実現されるので留意する必要がある。この「ピボタル・ポイント」はリバモアのタイミング理論の根幹であった。

*テクニカル分析をする際に知っておくべき知識のひとつです。天井圏や底値圏で見られるリバーサル・パターン(反転パターン)と、もみあい時に見られるコンティニューエーション・パターン(継続パターン)の2つがありますが、コンティニューエーション・パターンは名前が示す通り、大きなトレンドの中でいったん踊り場的なもみあいを形成する時に見られます。

- ◇ 相場の終盤になると、恐ろしいほど値を上げる株があるので、ギリギリまで保有し続けること。波に乗った銘柄は、株価収益率が三十倍、四十倍、五十倍、六十倍でも売ることが出来る。こうした人気株も波に乗る以前は、拍子抜けするほど安い価格だったということも珍しくない。
- ◇ さしたる理由もなく、単に「人気株」というだけで棒上げしていく銘柄があるので注意する。
- ◇ 「高値更新」はタイミング指標として極めて重要である。高値が更新されるということは、その株の限界的需給バランスが崩れ、最小抵抗ラインが勢いよく上昇していることを意味する場合が多い。しかし、多くの人々は、高値を更新した時点で売却し、安い銘柄を物色しはじめる。
- ◇ 「同一業種の株価連動」もタイミング指標としては重要である。USスチールが上昇、もしくは下落すると、遅かれ早かれベスレーム、リパブリック、クルーシブルなどの鉄鋼株もそれに追随する。理由は簡単で、USスチールにとっての好材料もしくは悪材料は、業種全体に影響を及ぼすと見られるからである。
- ◇ 業種の中で主力となる銘柄を選ぶこと。
- ◇ 強気相場になると、多くの銘柄が上昇傾向を示すが、取引の対象を選ぶ場合には相場をリードする銘柄を選ぶ。またそのような銘柄がつかずいたり、高値を更新しなくなった場合、トレンドが変わるシグナルと受け取った方がよい。
- ◇ 値動きを追う場合、それぞれの商いの日の主要銘柄に限る必要がある。また、各業種の主力株を対象とした取引で利益が得られない場合、その時期のマーケットから利益は得られないと見た方がよい。適正なアクションを取っている限り、利益もまた確保される。
- ◇ 株価が思惑と逆の方向に動き出したらどこで清算するか、明確なルールを決めておく。そして、このルールに厳密に従うこと！
- ◇ 最も可能性の高いコースに資金を集中させる。最初は小口の取引から始め、その結果を見て、本格的な勝負に出る。いくら判断が正しいと思っても、一気に資金を投入するのは間違いである。
- ◇ 予想外の出来事に遭遇したら、即座に反応すること。予期せぬ幸運なら間髪を入れずその果実を得るべきだし、悪い出来事であれば、即座に撤退する。決して躊躇してはならない。
- ◇ 長期に及ぶ上昇トレンドの後、大商いが出現し、相場が沸き返る事態となったら警戒すべし。こうした状況は、従来のトレンドが終息する間際にしばしば起こる。この大商いは、建て玉が強者の手から弱者の手へ、すなわちプロから素人の投資家に移動していることを意味する。一般投資家はしばしば、この大商いを市場が活況な証拠と勘違いする。流れが大きく変わるフシ目と見ないのであ

る。

- ◇ 一般投資家は、インサイダーが保有株式を処分するのは上昇局面だと信じがちだが、これはしばしば錯覚でしかない。インサイダーの大部分が購買意欲の確かさを見て保有株式を売却した結果、高値が更新され、その株が市場にだぶつき始め、乱高下し、ゆっくり下落局面に入り始めたに過ぎない。このときの出来高はピークとなる。しかししばしば、もはや高値は更新されず、必要以上の株が供給され、市場にだぶつくようになる。

2、資金管理に関するルール

- ◇ 停止ポイントを設定する。株価が思った方向と逆の方向に動いた場合どこで見限るか、明確なポイントを事前に定めておく。10パーセント以上のマイナスは抱え込むべきではない。こうした損失をカバーするには、場合によっては二倍のコストを要することになる。
- ◇ 信用取引の場合、追加の証拠金請求に応じてはならない。
- ◇ 「評価益」を定期的に「現金」に転換せよ。得られた利益の何パーセントかを、現預金、債券、年金といった安全な資産に換える。現金は、過去、現在、未来、いつの時代にあっても「王様」だ。現金は銃の弾薬であり、一部の現金をつねに取りおいておく必要がある。このルールに従わなかったために、わたしは何度か危うい立場に立たされた。
- ◇ タイム・イズ・マネーは相場の世界では成り立たない。なぜならマネーが動かず、利益を生まない「時」があるからだ。タイムはタイムであり、マネーはマネーである。しかし、ただ、座っているだけのマネーも、時にチャンスにめぐりあい、多大な利益をもたらすことがある。忍耐、我慢、自制こそ成功のカギである。ゆめゆめ急いではない。
- ◇ 先を急いではない。相場で成功したもので、休みなく取引を続けた者はいない。投資資金をすべて引き揚げ、休みをとるチャンスはいくらでもある。市場の動向が定かでないときは、しばらく間をおき、確信をもてる状況がきたら再度参入する。
- ◇ チャンス到来と思ってもすぐに全力投球せず、打診すること。まず、全資金の二〇パーセントを当て、二回、三回と二〇パーセントずつを投入する。この結果、自分の判断に間違いがないことが確認できたら、最後の四〇パーセントを投入する。株価の動きが思惑と逆の方向を向いた場合、それがどの時点であり、すべての取引を終了させること。
- ◇ 「負け」銘柄はすぐに切り捨てる。「勝ち」銘柄は、すべての要因が順風下にある限り、そのまま動きに任せる。

3、感情の制御に関するルール

- ◇ 株取引において、感情を制御することは最も重要である。
- ◇ 期待、あるいは予想してはならない。相場から糸口、シグナル、ヒントを持ち、それを確認してから行動する。確認した後にだけ行動することが重要で、期待や予想は落とし穴と心得よ。期待や予想をもとに行動を決するのは自殺行為以外の何のものでもない。相場は明日もある。糸口の発現をじっと待つ辛抱強さがあれば、どう動くかを定める時間も十分もてるだろう。
- ◇ 株は人間と同じで、それぞれが異なった「顔」を持っている。活力の旺盛な株、慎重な株、激しやうい株、神経質な株、直接的な株、動きが遅い株、古風な株、未来志向の株、論理的な株、非理論

的な株と、千差万別の性格を持つ。人を観察する要領でそれぞれの銘柄に目を向けること。それぞれの性格がのみ込めると、どんな状況下にどんな動きを示すか、予想がつくことになる。

- ◇ ある銘柄がなぜ特有の値動きをするようになったのか、その原因究明に多大な時間を振り向けても意味は無い。そんな時間があつたらむしろ、事実そのものの検討に時間をかけること、重要なことはテープが何を言い、何を示しているかではない、そして最も重要な点は、決してテープに逆らわないことだ。
- ◇ 他人の忠告に耳を貸すと、往々にして、自らの確信が揺らぎ、自分の判断は間違っているかもしれないと迷いだす。悪くすると、優柔不断に陥り、誤った判断を下すようになる。優柔不断は自信喪失を引き起こし、投資金の喪失につながる。
- ◇ 「ここだけの話」は、親戚、恋人、友人、知人と、あらゆる方向から入ってくる。そうした場合、情報の発信者も多大の投資を行っており、他人にも利益を施したいと思っている。もちろん、宣伝屋、犯罪者が発信源であるケースも存在する。くれぐれも「危険でない情報は存在しない。すべての情報を排除する」ことを忘れてはならない。
- ◇ **取引にかかわる辞書から「希望」という文字を排除せよ。**株取引が何かをもたらしてくれると希望するのは「ギャンブル」以外の何ものでもない。ある銘柄を売買するのに、確固とした理由が見当たらないという場合には、より論理性のある銘柄を捜したほうがよい。**値上がりしてほしい、あるいは値下がりしてほしいと希望を抱いたばかりに、これまでどれほど多くの投資家が姿を消していったかしのれない。**希望はまた、つねに食欲さと一体になって、投資家の周囲を徘徊している。
- ◇ 気持ちの浮き沈みに振り回されない。多大な儲けに酔い、自分に自信を持ちすぎるのも問題であるが、損失をこうむり、意気消沈し過ぎるのも感心しない。
- ◇ 「株式市場はいつの世も変わらない」。株式市場で変化するのは、そこに出入りする顔ぶれだけである。新規参加者は、自分が参加する以前の相場を知らない。一九〇七年の暴落も一九二九年の大恐慌も、自らの金を賭して経験しなければ、知らないのと同じだ。新参加者にとっては初めての出来事でも、相場自体は周期的に動いている。
- ◇ **自分なりの取引手法に忠実に従う事。やり方をコロコロ変えてはいけない。自分の性格に合った無理の無い手法を考案し、そのルールにしたがうこと。**
- ◇ 株式投資は「安全重視」の預貯金とは違う。投資家の目的は、長い時間をかけ、手持ちの資金を安全・確実に増やす事ではない。**相場の上昇局面、あるいは下落局面に照準を合わせて投機を仕掛け、利益を得ることが株式投資の目的である。**
- ◇ 単独行動に徹し、自分の資金の行方は自分で決めること。また取引にかかわる行動は内密に、口外しないことが極めて重要。取引についての「勝利」もしくは「敗北」を口外してはならない。
- ◇ 成功者と賞賛される相場師も、一年三六五日、相場を張っているわけではない。すべてを現金化し、マーケットを離れた方がよいと判断される時期は少なくない。市場に方向性が見えないと思ったら、「待ち」を決め込むこと。
- ◇ 相場が思惑とは逆の方向に動き出したとき、冷静さを失ってはならない。それと同時に、成功を手にしたときも、利益を得るのはたやすいなどとうぬぼれてはならない。テープにケンカを売ってはならない。テープ以外に真実はないのであり、テープとの調和を保っていく必要がある。
- ◇ すべての点で順調に推移するケースについては、その状態を維持せよ。
- ◇ 優れた相場師、投資家には少なくとも次の「四拍子」がそろっている。
冷静な観察力—あるがままの事実を先入観なしに観察し、認める能力

明晰な記憶力—重要なできごとを正確に、客観的に記憶する能力

優れた計数能力—数式計算、数学のセンス

独自の体験—過去の体験をうまく次の利益確保に生かしていける能力

- ◇ 無意識の訴え、一見無意味な衝動も、潜在意識からの働きかけ、すなわち何年にもわたって蓄積された経験や情報が発する声と見ることができる。わたしは時に、その時点で理由が明らかでない場合でも、自分の無意識の声に従って取引をした。アリストテレスの「われわれは皆、過去の体験の集合体である」という言葉を信じたからである。
- ◇ 株取引で成功したいと思うなら、以下のような感情を抑制しなければならない。
 - 食欲**—必要以上の、あるいは正当と認められる以上のものを求める気持ち
 - 恐怖**—人間に理性的でない行動をとらせ、正常な判断力を失わせる **toushi** 感情
 - 希望**—常に食欲さと手を携えていて、無知、恐怖などと同様、合理的思考を狂わせる
- ◇ **無知を警戒せよ。学習、研究をしっかりおこなうこと。**遊び半分ではなく、本腰を入れて取り組まなければならない。株取引には、楽に金が儲かるといった印象があり、人を魅了するが、愚かで安易な考えから相場に手を出せば、簡単にすべてを失ってしまう。無知の対極にある知識は、大きな力となる。
- ◇ 相場を人間の手の内に入れることはできない。市場参加者の大部分が負けるようになっている。そのためここに示すルールはしばしば、人の本性に反する内容となっている。
- ◇ 取引に休みなくかかわってはいけない。生身の人間の精神状態を考えれば、また経済的観点からも、相場から離れるべき時期は少なからず存在する。
- ◇ 「買う」にしろ「売る」にしろ、相場の動きが自分の思惑と一致しない場合、最適な時期を待つべきである。両者の不一致を知りながら、自分の取引に合理的な理由を見つけようとするのは愚かである。
- ◇ 株式にかかわる「耳打ち」を真に受けてはならない。「強気相場では株価が上昇し、弱気相場では株価が下落する」これこそが絶対の真理と肝に銘じるべきで、耳打ちの相手に伝えるべき返答である。
- ◇ 過ちを犯していると知りつつ、誤った道に行くことは愚かである。自らのルールを破った自分を後で悔やんでも遅い。**ルールは決して破るべからず。**
- ◇ **下落に向かう銘柄をつかみ、資金を投げやる「投資家」になるなかれ。**
- ◇ 「強気」あるいは「弱気」といった用語は回避すべきだ。なぜならこうした言葉により、相場の動きが気持ちのうえで必要以上に長く固定化する結果となる。相場の状況をどうしても説明しなければならない立場に立たされたなら、「上向き」「下向き」といった表現を用いるとよい。「最小抵抗ラインは現在、上を向いている（あるいは下を向いている）」といった具合だ。
- ◇ **投機ビジネスは一つの職業だ。どの職業でもそうであるように、この分野で成功を得ようと思うなら、勤勉に働き、努力を重ねる必要がある。**

「ウォール街に、あるいは株式投資・投機に新しいものは何もない。ここで過去に起こったことは、これからもいく度となく繰り返されるだろう。この繰り返しも、人間の本性が変わらないからだ。人間の知性の邪魔をするのはつねに、人間の情緒である。わたしは以上のことを確信する」

ジェシー・リバモア

